改めまして、『何かをたくらんでる後輩ちゃん』をお買い求め頂き、誠にありがとうございました。

こちらの台本は、読みやすさの観点からト書きなどを予め削除し、内容補完用として新たに作成しました、読まれた内容を基準にしたものとなっております。

収録などで実際に使われたものとは異なる点、予めご了承下さい。

なお、当然ながら本編の内容の全てが記載されておりますので、本編をまだお聞きでない場合は、くれぐれもネタバレにはご注意ください。

またこの物語がお気に召した際は、後書きにて少し掘り下げて語ってもおりますので、是非おまけフォルダにございます『むねポケ通信その1』も合わせてご覧下さい。

|| || 目次 || ||

- 01 先輩、お小遣いくれませんか？
- 02 屋上でマッサージします！
- 03 1つ賭けでもしませんか？
- 04 右の耳かきは強引に
- 05 左の耳かきは本音を添えて
- 06 回りくどい企み

|| || 後輩ちゃんの紹介文 || ||

かしむら
榎村 つきみ

一学年先輩である『あなた』に何かとつきまといってくる、明るく無邪気で単純そうな後輩。基本は何でもそつなくこなせるが、テストの点だけは常に赤点ラインをさまよっている。(特に理数系は壊滅的)

元来のフランクな性格も相まって、『あなた』とはどこか友達のような感覚で付き合うことが出来ているが、実は何かに焦ってもいるらしく……？

「あ、せんぱーい」

「放課後なのに、なーに黄昏たそがれながら廊下歩いてるんですか? あ、もしや……失恋でもしちゃったんです? 告白して玉碎? うわー、バレンタインデー間近っていうこんな時期に、それは……」

「……あいたっ!」

「もー、いきなりデコピンなんて、ひどいじゃないですか! いくら温厚な『つきみ』ちゃんといえど、怒るときは怒りますからね?」

「……あ、いえいえ、別に痛くはなかったですよ」

「ただその、前髪の、セットが……」

「ていうか、そんな反応返してくるってことは……まさかホントに、好きな人でも出来たんですか? ……あ、はい、その表情だけで、見当違いな事は分かりました。だからその、心底あき呆れたような顔向けてくるの、やめて下さいってば」

「ま、先輩は未だいまにフリーだって事が分かって、ひとまず安心したところで。……ねえ先輩。私、実はいま、お金がないんですよ」

「あのー、聞こえませんでした? お金が、ないんですよ。しかも近々、ちょーっとお高い買い物控えてるんですよ。なので、めっちゃくちゃ困ってるんです。だから、その……お小遣いとか、くれたりしませんか?」

「あ、ちよ、ちよっと、待って下さい、って!」

「何も、ただでお金貰もらいたいーって言ってるわけじゃないんですよ。例えば部屋の掃除とか、買い物に付き合うとか……そういったことの対価として、そう、言わばお駄賃だちんが欲しいんです。どうです? 何か私にさせたいこととか、ないですか?」

「……急にそんなこと言われても、って雰囲気ですけど。どうせ部屋とかとっ散らかってるんでしようし、私にどーんと任せてくれても良いんですよ? だいじょーぶです、変なもの見つけたりしたら、ちゃんんと机の上に綺麗きれいに並べておきますから」

「むー、ダメですかー。うーん、そうなるともう、肩たたきぐらいしか選択肢が……ねえ先輩、肩とか凝ってます？ ……そーですか。まあその年で肩凝りとか、どんなおじーちゃんだって話ですもんね」

「あ、でも、耳なら、凝ってなくてもマッサージすると気持ちいいって聞いたことありますよ」

「はい、耳です。ほら、普段揉んだりしないじゃないですか、耳って。だから結構気持ちいいみたいですよ？ 血行が良くなって……あ、えと、今は、ダジャレじゃないですかね？」

「……おっ、興味湧いてきましたか？ ですよねですよね！ じゃあそうですね、今なら……ビシビシッ！ これくらい貰えれば、すぐにでもやっただげますよ。どうですー？ お昼ごはん何回か抜くだけで、すぐ払える金額ですよ？ あ、ちなみに明日になると、残念ながらもう2〜3本、指がここにプラスされちゃいます。奥さーん！ 今だけのチャンスですよー！」

「はい、それじゃ交渉成立ってことで……早速、屋上にも行きましょうか」

「ええ、屋上です。横になるのが一番リラックス出来ますからね。けど、教室とかじゃ人の目がありますし、床に寝転ぶとか中々しにくいですし。それに、そもそも何してるのーとか聞かれるのもめんどくさいですから。その点屋上なら、この時間はまず人なんていませんし、人目を気にせず寝っ転がれるはずですよ。まあ本当は、保健室のベッドとか使えれば、一番良いんですけど……」

「へ？ あ、はい、こちらの準備は、もうバッチリですよ。大体こうなるだろうなって予想してたんで、必要なものは既に持ってきてますし、動画とか見てイメトレもしてます。なので先輩は深く考えなくて、ただついて来てくれればオツケーなんです」

「さ、それじゃあ先輩の気が変わっちゃう前に、さっさと行きますよー」

「んー、良い天気……」

「そして、やっぱり誰もいなかったですね、屋上。日差しのおかげで思った以上にあったかいですし、これならゆったり、先輩との時間を過ごせそうです」

「さて、と。それじゃすぐにレジャーシート引くので、先輩はその上に寝っ転がってくださいか？ ……あ、レジャーシート、いらないです？ えーと、まあ先輩が気にならないなら、良いですけど……」

「それじゃ、畳んだジャージでも置いておくんて、それ枕代わりにして、仰向けに寝転あおむんどいてください。こっちはその間に、ちゃちゃつと用意、しちゃいますから」

*

「……せんぱーい？ もう寝たりしてませんか？ あ、良かった良かった。それじゃ始める前に、軽く説明だけしときますね」

「今回先輩の為に、特別にご用意したのはこちら。ベビーオイルです」

「あれ、ひよっとして先輩、ベビーオイルって知りませんか？ これベビーって名がついてますけど、いろんな用途で使えるんですよ。マッサージだって、立派な用途なんです」

「ああ、これそんな高いものでもないですよ。百貨で買ってきたものですし。そもそもお金なくてこういうことしてるのに、高いメーカー品買ったりしたら、本末転倒ですしね。コストカットにも気が回るところが、敏腕エステティシャンたるゆえんです。ま、今日が初仕事なんですけど」

「それで、このオイルを手になじませた後、耳の外側とか、耳穴の周りとかを中心に、スリスリしたりする感じですね。あ、気持ちよかったですら、寝ちゃっても大丈夫ですからねー」

「あっ、ちなみにですけど……耳に傷とか、ないですよね……？ そういふのがあるとダメだって、調べた時に書いてあったんですけど………だいじょぶ、そうですね」

「なら、早速行きますよー」

*

「どうですか？ 中々心地よくないですか？ って……ちよつと、あれですね。覗き込んだりすると、顔近くて、何かちよつと照れますね、えへへ……」

「あ、いまフワツと香ったの、気づきました？ 実はさっき『百均なのに高級ブランドみたいな香りだ』って話題になってるハンドクリーム、手首に付けておいたんです。淡いラベンダーと……バラ、ですかね？ どこか石けんみたいな雰囲気もほんのりと感じますし、何だかすごい気に入っちゃったんですよー。オイル買うついでにたまたま買ったものだったんですけど、他の店だと売り切れたりもしてるみたいで、ほんとラッキーでした」

「あつ、香りですか？ んと、ちよつと待ってくださいね……」

「……えーつと、フローラルでブリーズな香り、だそうです。華やかで落ち着く香りをお楽しみ下さいーって書いてありますね。……落ち着けてますか？ ん、なら良かったです」

「ちなみにこれ、オイルに混ぜちゃったりするのも良いかもーって考えたんですけど、いつまで経っても耳からいい匂いするのもあれかなーって思ったんで、何とか踏みとどまっただですよ。……あ、ですよ。良かった良かった、踏みとどまれて……」

*

「しかし、のどかですねえ……」

「こんなに平和だと、あと数週間で先輩が卒業しちゃうだなんて、全然信じられませんよ。ま、当のご本人さんはもう進学先決まってる、余裕すらにじみ出てる学生ライフを送っているからってのも、あるんでしょうけど」

「いやー、推薦で早々に合格が決まってるのって、ホント羨ましますよ。私なんて馬鹿だから、ゼーったい推薦なんて受けられませんもん。はあーあ、こんなことならもちよつと真面目に、勉強とかしておけば良かったなあ……」

「……あのー、センパイ？ 悩める後輩がアンニユイな呟うごめきしてるんですから、少しは気の利いた対応とか、してくれたりしないんですか？ 全くもー……」

「そんな先輩には……うりやうりやうりやうりや」

「……全然気持ちよさそうにしていますね……。まあマッサージなんて、それで全然、いいんですけどね」

「ところで先輩。今年のバレンタインは、貰^{もら}う当てとかあるんですか？」

「……むむー？　なんですかその反応。あるのかないのか、全然分かんないんですけど」

「あっ、もしかして。私のこと、カウントしようか迷ってるとか、ですか？　……あははー、いや、去年が去年でしたもんね。カカオが90……6パーでしたっけ？　いやあくあのチョコ、あまりに先輩が可哀想^{かわいそう}なんで少しだけ引き受けたら、ウケ狙いで渡したことを軽く後悔するレベルで苦くて、食べきるまでずいぶん掛かりましたもん。あんなちよつとでもああでしたから、先輩はもっと苦い思いしてるはずですよ、きつと」

「でも、あれほどじゃないにしても、甘すぎないものがいいいんですよね？　確かそんなことを聞いて、それで私、アレ買った記憶ありますから」

「で、話は戻しますけど。私はともかく、他の人から貰^{もら}う当てはあるんです？」

「……なるほど、だんまりですか。そーですかそーですか。なら、マッサージはこれでおしまいです」

「なんですかー？　続けて欲しかったら、それなりに誠意というものを見せて貰^{もら}いたいんですけどー。……まあ一応、お代がそれに当たるものだーって言われたら、私にはもう、何にも返せませんけど……」

*

「え？　あ……ホントにもう、良いんですか？」

「あー、その……確かに、慣れてないこととしてますし、手とか疲れてはきてましたけど……でも、さっきのはちよつとした冗談ですし、まだまだ全然やれますよ？」

「……そう、ですか。……あはは、すいません、どちらかといえばお客さんであるはずの先輩に、気づかひまでさせちゃって。でも、しっかりばっちりリラックス出来たーっていうんなら、何も言うことはないですもんね」

「じゃあ約束通り……お小遣い、良いですか？　あ、耳ベタベタしてるでしょうし、これで拭いちゃって下さい」

「はい、ありがとうございます。……良かった良かった、これで何とか予算の確保が出来ました」

「……ひよつとして、何を貰うのか、気になってたりします？　いやあ……さっきの会話

聞いてたら、普通に分かりそうなものなんですけどね……。先輩、私の話、ちゃんと聞いてました？」

「ま、先輩が朴念仁ぼくねんじんだってことくらい、痛いほど分かってますから、特に幻滅したりはしませんけど。……。じゃ、私、このあと寄るところあるんで、お先に失礼しますね」

「……あ、そうだ。先輩、次の登校日っていつです？」

「なるほど、了解です。じゃあその日は、色々と楽しみにしてて下さいね」

「お、先輩じゃないですか。珍しいですね、先輩の方からこっちに来るなんて。で、何か用ですか? ……まあ、察しはもちろん、ついてますけど」

「はい、そうです。大奮発しました! 何せ高級チョコと言ったら、一番に上がるようなブランドですもんね。あれで高くなかったらパチモンですよ、パチモン」

「……いや、実はですね。割と気にしてたんですよ、去年のこと。先輩にとっては、文字通りの苦い思い出になっちゃってたでしょうし。悪いことしたなあーって。だからそのお詫びというか、今年のでそれを上書きというか……ま、そんな感じですよ」

「ああ、いや、大丈夫ですよ。お金に関しては、言わば『善意のマッチポンプ』みたいなものですし、特に気に病まなくても平気ですよ」

「……ひよっとして先輩、マッチポンプって言葉に、何か引っかかっています? ま、今のでピンと来ないんじゃない、深く考えても無駄だと思えますけどね」

「ただ、そうですね……あのレベルでーとは言いませんけど、お返しの方は、期待させて貰いましょうかねー。……って、あれ? よく考えたら、今年のホワイトデーは、先輩もう卒業して……ますよね? うわ、それじゃ私、おちやくちゃ損じゃないですか!」

「あ、でもちよっと待って下さい。……良いこと考えましたよ?」

「ねえ先輩、今日の放課後、私と一つ賭けてもませんか?」

「はい、賭けます。それを受けてくれるなら、お返しはチャラにしてあげますよ」

「で、対決する内容は……私と耳かき一本勝負、とかどうですか? 実はちょうど、耳かき持ってきてますし。あ、ちなみにこれも、百貨で買ってきたものなんですけどね」

「いや、耳かき持ってたのは、別に偶然じゃないですよ? 前、耳をマッサージしたじゃないですか。その時に中がちょっと気になってはいたんですよ。それで今日、機会があるならやっただけよっかなーって思ってたんです」

「で……耳かきって、よく寝ちやう人いますよね? 私今日、先輩を寝かせられるかもなーって、密かにワクワクしながら登校してきたんですよ。だからそれを、いっそのこと勝負にしちやおうってわけです」

「耳かき中に先輩が寝ちゃったら、私の勝ち。先輩が耐えきったら、先輩の勝ち。で、勝ったら好き勝手出来る。例えば……フリフリポテトを奢らせたり、恋愛映画に付き合わせたり……」

「ま、そこら辺は、勝った人の自由ってことで。こんなルールでどうでしょう？」

「はい、じゃあ交渉成立ですね！ それじゃ長丁場になるかもですし、ちゃんと帰り支度を整えてから、放課後屋上に来て下さいね。待ってますから！」

「来ましたね、先輩。怖じ気づいて、泣きながら逃げ帰ったかと思いましたよ」

「それじゃ、前と同じように横になって下さいね。あ、カバンはテキトーにそこら辺、置いていちゃって下さい」

「で、枕は……んーと……そう、ですね、これは賭けなんですし、前みたいにジャージの上とか言ってもらえませんよね」

「……でも、一応横には、置いて……」

「……先輩！ 私の膝、どうぞー！」

「……割と躊躇無く、頭を乗せましたね。まあ、私が気にしすぎだとは、思うんですけど」

「でも先輩、ホントに膝枕でいいんですか？ ……屋外で、風が吹けばちよーっと肌寒いんですけど、でもコートを布団代わりに掛けてからの……この、私の太もからのぬくもり、なんですよ？」

「人肌の暖かさをぬくぬく感じながら、ゆったり耳かきされて……これで眠れないって言うのなら、カフェイン取り過ぎて死にかけてる人か何かですよ、絶対」

「あ、ていうか！ 事前にコーヒーとか紅茶とか、仕込んでから来たりしてませんよね？ ……。……なら、良いんですけど。そんなの、完全にレギュレーション違反ですしね、公平じゃないです。ドーピングですドーピング」

「じゃ、ドーピング検査、合格ってことで……最初は、そっち側から良いんですか？」

「はい。それじゃ早速、右耳から、いきますね」

*

「んしょ……っと。あ、眠くなったら、いつでも寝て貰って大丈夫ですからね。すやあ〜ってやっちゃって下さいよ、すやあ〜って」

「……なんだか、意地でも眠らないぞ！ ってオーラを感じるんですけど……せんぱーい？」

せめて暗くなる前には、ギブアップして下さいよー？ 手元見えなくなったら、さすがに危ないですしねー」

「え？ いやいや、なんか驚いてますけど……ルール決めたときに、私時間指定しませんでしたよね？ つまり私その気になれば、1時間コースだって、思いのままなんです。もちろんそれだけ耳掃除をやったら絶対耳に悪影響ありますけど、ある程度きれいしたら、長く続けるモードにするんで、そのところも安心して下さいね」

「ってことで、先輩は既に、私の策略に見事にハマってるわけですけど……とはいえ、こちらにも根負けの危険がありますし、出来れば早めに諦めて貰いたいですよね。……あ、そーだ。勉強してたら眠くなりますし、勉強のこと考えて貰えばいいんじゃないですか？ 名案名案、ええっと……」

「……えつくすいこーる、わいいこーる、ろくじゅうはち……いんでぐるる、いんでぐるる、いんでぐるる……」

「何か思ってたのと違いますね？ これ」

「あつ、そういえば。眠れないときは羊を数えればいいんですけど。今が絶好の機会じゃないですか。ええと……」

「羊が一匹、羊が二匹、羊がえつくすひき、羊がわいひき、羊がさんえつくすびき、羊がばいあーるじじよーひき……」

「羊が点Pに向かって、等速直線運動で……忘れ物に気づいた羊が、時速500キロで追いかけて……追い越すまでの距離差を、えつくすいこーる2で微分して……さんへーほーのてーりを、摩擦係数ゼロにて、いんすーぶんかいして……」

「……だ、ダメですなこれ、言ってるこっちが、なんだか悲しくなってきましたし……そもそも耳かきにすら、集中出来なくなりますもん」

「はあーあ。なんで点Pって、動くんでしょね……」

*

「……つと、あらかた終わったんで、ひとまず梵天いれますねー。ほわほわ」

「ところで先輩。先輩って、この勝負に勝ったら、何するつもりなんです？」

「深くは考えてない、って感じですか？ ……なら、私の為を思って、負けてくれても、

良いんですよ？ だーいじょうぶです。悪いようには、しませんから」

「うーん、何しましよつかねー。いつものミルクティーとか、買いに行ってもらってもありですよ。あ、でもそういうお願い事だと、結局あの高級チョコの対価が、ミルクティー一本とかになっちゃうんですね。それはちよつと、勿体ない気もしてきますねえ……」

「……よし。先輩、こつちとりあえず綺麗きれいにはなったんで、一旦反対向きになってもらえます？ 掃除、先に全部終わらせちゃいたいので」

「じゃ、左耳も、ひとまず掃除、していきますね」

「ところで先輩。あのチョコって、もう味見とかはしましたか？ ……そうですか」

「……あの、これだけは言っておきたいんですけど。アレは私が勝手に渡したものですし、くれぐれも重たくは考えないで下さいね。後、一人でこっそり食べて下さい。多分日持ちはしますから、一人でも食べられるでしょうし」

「私なんか、日持ちしないはずの生チョコですら、だらだらと日にち掛けて食べたこともありですよ？ 要冷蔵で、賞味期限も相当短いはずなんですけど、自分の机の引き出しの奥の方に隠して、一日一個ずつちまちまと楽しんでた感じです。今にして思えば、よくお腹壊さなかったものですよ」

「お父さんが出張のお土産で、たまに小箱に入った生チョコ買ってきてくれてたんですけど、ある日2種類買ってきたから、こっそり一つを持ち出しちゃったって感じです。で、バレなかったから、そのまま隠れて楽しんでました。一つずつ切り分けて、舌の上で溶かしていくのが、本当に至福のひとときでしたね……」

「……先輩も、生チョコが良かったですか？ それとも実は、手作りのチョコがご所望でした？」

「手作りのチョコは……まあ、作ろうと思えば、作れますけどね。でも実際に渡されたら、絶対に先輩は身構えてたと思いますよ。去年が去年でしたし、中には何が入ってるんだー、とかいいそうですし。……ていうか私も、一粒ぐらいは何かしなきゃいけないかな、っていう変な衝動に駆られますし……」

「だからやっぱり、あのチョコを渡して正解だったんです。そのおかげで、先輩とこうして、ゆっくり過ごせてるんですもん」

「……あ、先輩、梵天ぼんてんに移りますね」

*

「この寒空なのに、鳥は普通に、飛んできますね……」

「……私、あの日以来、鳥を仰ぎ見るの、ちょっと怖くなっちゃったんですよ。ま、そ

りやそうですね。下校してたらいきなり、新品の制服に鳥の糞、落とされちゃったんですもん。……新入生で土地勘もなく、周りに助けを求められなくて……たまたま通りかかった先輩がジャージを貸してくれなければ、本当に泣きながら帰ってたところでした」

「道ばたで先輩のジャージに着替えるとき、こっそり覗いてきたりするかもーって警戒してたんですけど、特にそんな事もなくて、本当に紳士的で。……まあ、助けた女の子がその後こんなにつきまといってくるだなんて、先輩はあの時、きっと想像出来てなかったと思いますけど」

「先輩。私、先輩が卒業するの……やっぱり、さみしいです。だから……」

「……いえ、なんでも、ないです」

「……」

「……寝ちゃっ、たかな？ ……」

*

「……先輩の頭、意外に重い、ですね……。ジャージに移すだけでも、一苦勞……よい、しょっと」

「今ので起きてない……ですよね？」

「………なら、賭けは私の勝ちですよ、先輩。約束通り、好き勝手なこと、させてもらいますからね」

「実はこの手紙を、私のいないところで、ゆっくり読んで欲しかったんです。だから今からこれを、先輩のカバンの中に入れちゃいますね、勝手に」

「……ちなみになんですけれど、バレンタイン前から色々と振り回してきたのは、ゼーんぶこのためだったんですよ？」

「先輩が読んだその瞬間から、これまで通りじゃいられない……そういう内容の、手紙です。だから目の前で読まれたり、あるいはお昼に読まれちゃって、朝と下校時で対応変えなきゃなんてことが、起きないようにしたかったんです。でもそれって凄く難しく、どうしたって見つかるリスクが出てきちゃうんですよ」

「でも、この方法なら……まあいろいろと強引ではありましたが、セーフティーには出来るかなーって思ったんです。勝負が掛かってたら、流石にたぬき寝入りなんてしないは

「ずですし、ちゃんと意識がないってことを確認した上で、カバンの中に手紙を仕込めますから。あ、ちなみにですが、放課後を指定したのも策略のうちです。帰り支度して貰もらわなきゃ、カバン持ってきてももらえませんからね」

「それに。たとえ寝かせられなくても、あるいは勝負に持ち込めなくても。先輩と一緒にいられる時間が少しでも増えるだけで役得だーって、思っても、いたんですけど。……結局なんだかんだ、上手くいっちゃいましたね」

「ふうー……」

「……よし」

*

「……先輩。起きて下さい。もう日が暮れますよー」

「ずいぶん熟睡されてたみたいですけど。当然これは私の勝ち、って事で良いですよね？」

「それじゃ早速ですけど、寝ている間に好き勝手なこと、させてもらいました。あ、もちろん何したかは言いませんよ？」

「……いや、あの、そんなに慌てふためかなくても、顔に落書きとかしてないですってば。そんなの、単なる嫌がらせじゃないですか。そんなことよりも、もーっと先輩が困るようなこと、既にしちゃってますからね」

「ふふう、さあ、どうでしょう？ 何されたかそんなに気になるなら、早く自分の部屋に帰って、すみずみまで確かめて見た方が良いと思いますよー」

「んじゃあ、眠気もすっかり覚めたみたいですし、私はこれで」

*

「あ、そうだ。実はこれから予備校に通い始めるんで、放課後とか会えなくなっちゃうと思いますけど、心配とかしないで下さいね。……まあそうでなくとも、先輩の残りの登校日数を考えれば、会える機会なんてあと数回ってところでしょうけど」

「はい、そうです。こんなお馬鹿なままじゃ、流石さすがに志望校はどこだーって言うのもおこがましいですからねえ。今更遅すぎる気もしますけど、行かないよりはマシだとも思いますし」

「だから……こうして話せる機会は、きっとしばらくお預けになると思います。……楽しかったですよ、こうして最後に、先輩とゆったりした時間が過ごせて」

「……それじゃ」

「あれっ、せ、先輩……？ どうしてここに？ ていうか先輩は今日、登校日じゃないはずですよね？」

「……あっ……それ……」

「……カバンに入れておいたそれ、ちゃんと読んでくれたんですね。……あの、今から人気がない場所に、これですか？」

*

「言っておきますけど、そこに書いてある内容、イタズラでもなんでもありませんよ。罰ゲームで告白しろーみたいなお話でもありません」

「……実を言うと、焦ってはいけません。先輩が卒業しちゃったら、思いを伝える機会、なくなっちゃうなー、って。でも恥ずかしくて、直接伝えるなんて絶対出来ませんし、かといってSNSとか使うのも、反応がすぐ返ってくる可能性があるじゃないですか。だから、自分なりに企くわだててみたんです。思いを綴つづった手紙を渡すための、回りくどい、企たくらみを」

「後、これだけは念を押しておきますけど。それに書いたとおり、今は絶対に、返事は聞きませんからね。どんな返事だったとしても、今の私にはまだ、聞く資格ありませんから」

「……せっかく勉強、頑張り始めたんです。私、本当に馬鹿ですけど、でもそれでも先輩の後を追いかけるために、一生懸命努力し始めたばかりだっていうのに……それなのに、ここで答え聞いちゃったら、絶対気持ちが萎えちゃうでしょうし」

「だから。……返事は来年、先輩の後を追っかけられたら、その時に聞きます。ちゃんと返事を聞けるように……私、頑張りますから」

「……はい。先輩はゆっくり、待っていて下さい」

「あ、それと。それまでの間、出来れば他の人とは、付き合ったりしないで欲しいんです」

「賭けに勝ったんですから、それくらい勝手なお願ひしても……良いですよね？」

// END //